

海外先進地行政調査報告書

平成20年7月13日(日)～19日(土)

派遣議員 細井敏彦、山本允、木村正範、土屋修美、神谷清隆、永田敦史

■都市計画及び環境施策（フライブルグ市）



フライブルグ環境局長の環境セミナーを受講。フライブルグ市が環境首都市となった背景として、35年前の原子力発電設置計画の反対運動がある。その際に反対するだけでなく対案を出そうということで、住民意識を背景に先進的な環境施策が推進された結果である。その環境政策は多岐に渡り、なかでも交通対策では、市内への車の乗り入れ制限に踏み切り自動車の交通量を制限する一方、総合的な交通システムを拡充させて市民の生活基盤を確保して

いる。都市交通は充実しているが、赤字は自治体の補填で賄われている。環境施策は国策として取り組まないと地球規模での環境施策はできないと強く感じた。セミナーの後、環境共生団地の現地調査を行った。日本でいう公営住宅に近いが、各種環境への配慮が行われ、団地内では路面電車の乗り入れ、ソーラーシステムの導入、共同駐車場の設置などを行っている。市がこのような住宅を設置するのは面白い試みであると同時に効果をなすと思われる。

■幼稚園（カールスルーエ市）

ドイツの学校教育システムは基本的に学費がかからないようになっている。小学校の入学や卒業年度も個人の成長により異なることもある。日独の教育制度を比較することにより、今日本の教育が抱える問題点の解決への糸口が見出せるのではと感じた。

訪問したカールスルーエ市郊外のカツェン幼稚園は、1グループ20～30名の少人数保育による縦割り保育が行われている。先生がやることを示すのではなく、園児が自分のやりたいことに取り組み、自主性や創造性を身につけさせる考え方のもとでの教育が行われている。このような人間形成の骨格となる芽は幼いときから育てていくことが必要だと感じた。



■ビオトープ（カールスルーエ市）

古くから緑が多い恵まれた条件を生かし、ビオトープ(生物生態空間)を重視したまちづくりが行われてきた。

全長14kmに渡る道路建設に伴い、地域が分断されることから、600mの道路上にトンネルをつくりトンネル上を緑地帯として復活させたビオトープを現地視察した。まちの中にビオトープを造ることにより、都心での落ち着ける場所を与えたり自然を身近に感じることができるので、住民の環境保全意識を高めるのに有効な施策だと感じた。